

タマネギの春まき7月どり栽培技術体系

バイオテクノロジー開発部 資源開発利用チーム

TEL:022-383-8131

研究の目的

タマネギは加工・業務用として周年需要がある品目です。県内におけるタマネギの慣行栽培は秋まきで、収穫期間は翌年6月に集中します。また、秋まきでは栽培期間が長く、タマネギの前後に作付けできる品目も限定されます。そこで、収穫期間の拡大と露地ほ場の効率的な利用を目的に、タマネギの春まき7月どり栽培体系を確立しました。

研究成果

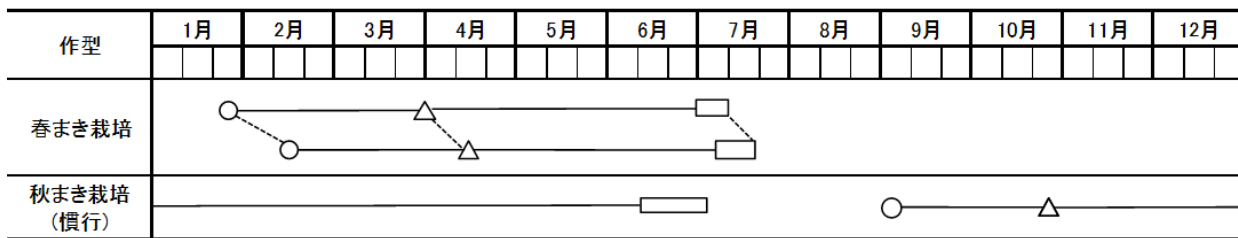


図1 宮城県におけるタマネギの春まき7月どり栽培の作型 (○：播種，△：定植，□：収穫期間)

春まき栽培の作型を図1に示します。

播種は1月下旬から2月中旬が適し、播種が早いほど、定植時期を早められ、収穫時の球重が大きくなります。

品種は、中生から中晩生のうち、病害に強く貯蔵性の良い品種を選択します。「もみじ3号」、「ネオアース」は球重が重く、収穫後の腐敗が少ないため、可販収量が安定します(図2)。

育苗にセルトレイを使う場合、ハウス内の土壌に幅約1メートルのベッドを作り、セルトレイ底面を埋め込む方法により良苗が得られます。

本ほへの定植は、秋まきと同様に株間10~12cm、条間20cmの4条植え、栽植密度は10a当たり22,500~26,000株程度とします。

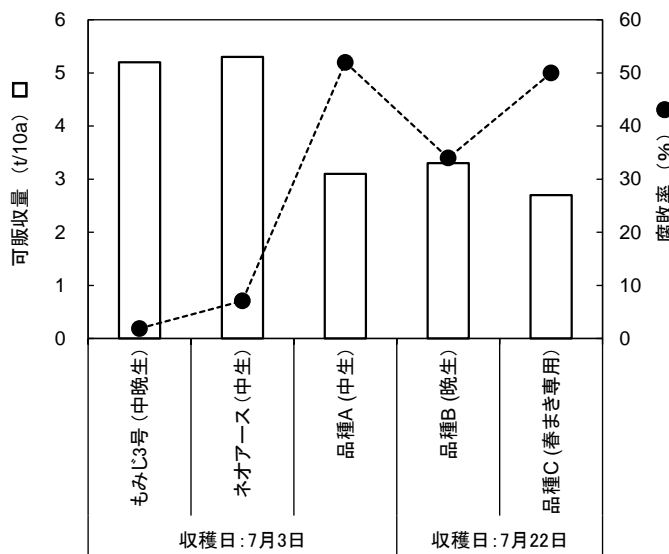


図2 春まきタマネギの品種別の可販収量と腐敗率 (平成27年)

利活用の留意点等

春まき栽培では、収穫期間が梅雨にあたり、茎葉から病害が侵入しやすく、貯蔵中に腐敗が発生しやすくなります。銅剤等の予防剤を梅雨前から使うなど、早期の防除が重要です。

本研究の一部は、農林水産省の「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」により実施しました。

より詳しい内容は「普及に移す技術」第91号(平成28年発行)「タマネギの春まき7月どり栽培技術体系」をご覧ください。

http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/res_center/91hukyuugijutsu5.html

